

3-8	
主題	トイレで排尿することを取り戻す為の取り組み
副題	統一したケアをするために排泄気付きシートを作って周知する

周知	排泄	研究期間	3ヶ月
----	----	------	-----

法人名	社会福祉法人 府中西和会		
事業所名	特別養護老人ホーム鳳仙寮		
発表者：森田 恭平（もりた きょうへい）	アドバイザー：なし		
共同研究者：清水 直紀 特養3階職員			

電話	042-360-1353	FAX	042-360-1353
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	特養定員 50 名。ショートステイ定員 20 名。名の小規模な施設の特徴を活かし、どなたでも安心して生活して頂けるよう楽しく明るく家庭的な雰囲気です。個室・2 人室・4 人室があり本人の意向や健康状態、ご家族の要望等を鑑み最良の介護を行うように努めています。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

当フロアは転倒リスクが高い利用者様が多く、職員が場当たりの介護をしていた。実際に転倒事故もあり、事故を起こしたくないという気持ちが先行し、利用者様本位の介護ができていなかった。

対象利用者 S 様男性。レビー小体型認知症。入所当初歩行は自立され、トイレに行きたい際にはご自身でトイレを探し使用していた。認知症の進行と共に立ち上がり、歩行時等バランスをとれなくなり転倒事故が増えた。対応策として座席にコールクッションを使用し立ち上がり時すぐに職員が対応できるようにした。S 様が立ち上がると職員はすぐに駆けつけ転倒しないよう、危険だからとそのまま座ってもらう事が多く見られていった。失禁も増えていき、リハビリパンツ+パットを着用した。

S 様への対応は本人の思いにそえているのか？立つ事の意味や、要因を考えていく必要

があるのではないかと疑問を感じた。S 様の機能を奪っているのが職員間での意識統一とアセスメント不足によると考えられることから S 様を対象とし、本研究を行う。

S 様が行きたいときにトイレへ行き気持よく排泄をし、職員間で統一したケアができていないことが今回の課題であった。

《2. 研究の目的ならびに仮説》

S 様が何故立ち上がったのか職員間での周知をし、統一したケアを実施していく。また、排泄のタイミングの把握をする事により、ご本人に沿った排泄ケアをしていく。

S 様は小声でぼそぼそと話される事が多くあり、言葉だけでなく、ジェスチャーや表情など非言語的な排泄のサインを探っていく。その一つとして表情に着目した。特定の表情をアセスメントに落とし込み分かりやすく周知していけることに期待した。

情報収集のツールとして新たな表を作成、フロア内で記入しまとめたものを共有、周知

し統一したケアを行えるようにするためこの研究に取り組んだ。

《3. 具体的な取り組みの内容》

①対象者：S様

②取り組みの具体的方法

情報収集のツールとして新たに排泄気付きシートを作成。内容は大きく分けて4つとした。

- ・言葉がけ（対応と反応）
- ・歩行時（移動時の様子）
- ・トイレの様子（排泄時の様子）
- ・ご本人の気持ち（予想や気付いたこと、本人が話したこと）

③取り組みの手順

- ・評価時間は8：30～17：30の日勤帯。
- ・1日1枚。排泄の度に職員が記入。誘導しトイレ内での排尿に成功したときのみでなく拒否があった際の失敗事柄も記入。
- ・排尿が出る時と出なかった時の表情を探る。（トイレ内で写真に収めず、言葉がけ時の表情に似た表情を日頃の写真の中から選定）

④取り組みの評価

排泄気付きシートで集めた情報を周知していく為に、「排泄版その人表」を作成。表の中心に両方の表情を載せ、周りに吹き出し形式で排泄気付きシートで得たポイントを記載するものとした。

《4. 取り組みの結果》

排泄気付きシートを使用し、取り組んで行く中で機能的にはトイレで排泄ができることがわかった。時間で動くような介助をしていたことと、立ち上がり何かをしようというS様の気持ちをわかっていたが、「忙しい」や、「人（職員）がいない」ということを口実にしていたことが、できることを職員の都合で奪っていたのではないかと。

S様自身トイレでの排尿後「ありがとう。」やトイレでの排泄に間に合ったことによる安堵の表情があった。又、できることを奪っていた事に対し、職員自信も考え直すきっかけになりS様の表情から情報を読み取ろうという

職員の意識の変化が見られた事から、取り組みは意味のあるものとなった。

《5. 考察、まとめ》

コールクッションを使用したことにより、職員がS様は転倒する人という認識になり、歩かせることを辞めてしまった。できることを奪ってしまう介助をしていた。気付きとして気づいたことを「いいね！下さいシート」（気付きを記入するシート）に記入するようにしていた為、排泄気付きシートの導入がスムーズに行えた。

今回、排泄気付きシートといった独自のツールを作ったことによって職員も意識するようになり、排泄気付きシートが未記入であったことは1ヵ月間の期間ほとんどなかった。排泄気付きシートを通し、S様の排泄タイミングを掴めた事により、リハビリパンツ+パットから自パンツへ今後移行していきたいと考える。S様に職員が関わるが増え、言葉に加え表情から読み取っていく事で、よりS様に一歩寄り添った介助に繋がったと考えられる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行なうにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもち同意を得た。

《7. 参考文献》

青山幸広著（2009年）「おむつに頼らない排泄介護術」（雲母書房）

《8. 提案と発信》

「定時」とは排泄介助の漏れをなくすためには必要なものだが、画一的な定時ではなく、その人の定時を見つけることが必要である。

職員周知の方法も難しいが、その人表を活用し今後も周知（統一したケア）気づき、チームケア、ケアの見える化の重要性を発信し続ける。